



詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通して、詩の味わいや、味わい方の多様さを探っていくという連載「詩味礼讃 好詩家たちの対話」。第四回のゲストは、詩人で絵詞作家の内田麟太郎さんです。子どもに向けて詩を書く面白さや難しさ、お二人の共通点など、さまざまなテーマで盛り上がりました。

「へん」は好きですか？

内田 私は不勉強で、今回対談の話をいただくまでは、マーサさんのことを知らなかったんです。

マーサ まだ、駆け出しの新人ですの。

内田 駆け出しといったって、中也さんと朔太郎でしょ？（中原中也賞と萩原朔太郎賞受賞のこと）

マーサ それは本当にたまたまで、ラッキーが重なって事がうまく運んでしまっただけなんです。

内田 高校生のときに中也がめちゃうくちや好きだったんだけど、私のなかで現代詩を読むことは、鈴木志郎康さんやねじめ正一さん、頑張っても荒川洋治さんあ

たりで止まっているんです。現代詩がつまらないからとかいうことじゃなく、二十代からずっと一緒にやってきた詩の仲間が死んでしまったりして、そうしたら現代詩というものが、ぼつとわからなくなっちゃった。それでどうしようかなと思って、でもまあ少年詩が向いていそうだから、残りの人生は少年詩と付き合っていこうと思ってるんだけど、そんなおじいさんを、なんでマーサさんみたいな若い人が対談相手に指名なさったんですか？

マーサ 私は自分がいる世界のパラレルワールドというか、この場所ではない異界に意識を向けて詩を書いているところがあって、それが内田さんのお名前を知るときっかけでもありました。内田さんは詩人であり、絵本の文章をつくる絵詞作家としても活動しておられますが、絵本というのは「行きて帰りし物語」と言われることがありと児童文学作家の瀬田貞二さんの本で「語」の行った先というのは異界のことだと、個人的には思ってたんです。

内田 「行きて」はともかく、「帰りし」の部分はあまり意識していないですね。

マーサ たしかに、内田さんの絵本の場合、行った先（異界）の存在と友達になってそのまま……。

内田 居ついでちゃう感じですよ、そこが面白くて。『狸の匣』で私はマーサさんの詩と初めて出会ったんだけど、マーサさんの世界には親しみを感じましたし、けっこうへんな世界を書いておられるなと思いました。あの中に「鮒わたし」って詩がありますよね。前の対談で（二〇一三年二月号の小島日和さんの回）、「小説は百人読んで、その百人がある程度作者が意図した情景を思い浮かべられなければならないが、詩については決してそうではない」という荒川洋治さんの言葉に触れていらっしやっただけど、「鮒わたし」が何かって、たぶん説明できないんじゃないですか？

マーサ 私の造語なので、一般的な用語としては説明できないですね。

内田 詩の中には「鮒わたし」って言葉も出てきて、「鮒わたし」も「鮒わたし」も意味がよくわからないのに、そのへんな言葉によって話が妙に進んでしまうところがある。昔、「閑話休題」に、「さて、おはなしはかわりました」とか、「ところで」なんてルビをぶっている本があって、あの「さて、おはなしはかわり

うちだ・りんたろう●1941年福岡県生まれ。詩人、絵本の文章や構成を担当する絵詞作家。詩集に『なまこのぼんぼん』（銀の鈴社）、「内田麟太郎詩集」（四季の森社）、絵本に『さかさまライオン』（童心社、絵本にっぽん賞）、「がたごと がたごと」（童心社、日本絵本賞）など著作多数。

まーさ・なかむら●1990年埼玉県生まれ。第54回現代詩手帖賞、『狸の匣』（思潮社）で第23回中原中也賞、『雨をよぶ灯台』（思潮社）で第28回萩原朔太郎賞を受賞。